

(昭和52年3月卒業生)

高松市の都市機能と市街化

池田友子

高松市は四国の北東部に位置し、“四国の玄関口”という地理的位置にも恵まれ、また交通の結節点としても四国の中心的位置を占め、香川県の県庁所在地として、そして、四国の中心地として古くから発展してきた。

そこで、本論文では高松市が香川県および四国内でいかなる役割を果たし、どのような機能面で優れているのか、その位置付けを行ない、高松市の都市としての特色を考察し、さらに現在の都市機能構造を把握すること、また、現在に至るまでに発展してきたその過程—市街化の動向—とそれを生みだした要因および規制条件などについて考察することを主たる目的とした。

本論文の枠組は、まず第1章で自然環境、人文環境の面より地域を概観し、第2章で高松市の都市機能を第3次産業に注目してその特色を考察し、また、都市的機能分類図を作製して、それより都市構造を分析した。第3章では市街化の変遷ということで、地図および統計的数値より高松市の市街地拡大状況を時系列的に把握した。第4章は第3章で考察した高松市の市街化の主たる要因は何かということで、都市機能の充実と関連させつつ物流機能・交通機能・地価などの面から考察し、第5章を本論文のまとめの章とした。

研究の結果、高松市は第3次産業に基盤をおく地域中心都市で、その中には特に官公庁銀行などがそれぞれその役割を担う行政管理機能・経済管理機能および商業機能で他市を上回る優位性を有し、香川県はもちろんのこと、四国の中枢都市として、現在、その役割を果たしていることがわかった。商業機能では特に卸売業が優れており、商品の販売先、仕入れ先が他市との比較において広域にまたがっており、物資の流れの中継地、集散地として、四国の商業活動の中心的位置を占めている。

高松市の都市構造は、先の行政管理機能・経済管理機能・商業機能など中心的機能が旧市の中心に位置してCBDを形成し、そこを核として市街地・郊外地・農村がほぼ同心円状に配列し、また、旧市から少し離れた所にいくつかの工業地区が位置する同心円構造をなしている。

高松市は現在、以上のような特色をもつ都市であるが、ここに至るまでにはさまざまな過程を経て発展してきた。経済の高度成長、都市化のあおりを受け、順次その市街地を拡大してきたのである。

高松市の市街化は、昭和35年頃より旧市で人口が減少し、その周辺地域に人口が流出するドーナツ化現象が始まり、次第にそれは遠くにまで及んでいった。しかし、その同心円的拡大も徐々にその形をくずし始め、現在では西側が遅れ、南および東方面でより進展するという傾向をみせている。

このような高松市の市街化は、高松市が四国の中心地として都市機能を充実させ発展してくるに従い、旧市が業務専門地域化し、職住分離の傾向が強まり、新市域への市街地拡大はそのベッドタウンとしての市街化であるといえる。そのため、交通機関の有無にはかなり影響されており、特に私鉄路線の通っている地域でまず市街化は進展している。さらに、地価の動向・地形・集団住宅の建設状況

にも影響を受けており、特に地価の動向は市街化のマイナス要因であると同時に、その先行指標であることがわかった。

四谷の地域性に関する地理学的考察

— 特に若葉町谷底低地を中心として —

井 関 五 月

(1) 目的

東京の市街地の町並みの変化は著しいが、東京駅を中心とする都心部と副都心新宿のほぼ中間に位置する四谷でも最近の変化は激しい。一方、台地上とそれを刻む侵食谷からなる山の手地域では坂を境として地域の分化がみられる事例が多いが、四谷もその典型的な一例といえ、四谷東南部の若葉町谷底低地では、周囲の台地上が旧山の手・高級住宅地域であるのに対して、路地裏に住宅が密集する特有の景観を呈している。

この研究ではこの谷底低地を中心とし、周辺台地上と谷底低地に認められる差、最近の変化の激しい四谷の中でのこの地域の変化の様子、さらにこの地域の形成とそれに作用した諸条件を明らかにし、東京の一部であるこの地域の地域性とその形成について考察する事を目的とした。

(2) 枠組

第一章「四谷の基本的性格」では四谷地区という地域を規定し、幾つかの資料によりここがどのような性格を持つ地域であるかを考察した。

第二章「台地上と谷底低地」では台地と侵食谷からなる四谷地区の自然環境、台地と低地両地域の歴史の変遷、更に都心業務機能の拡大に伴う最近の変化と現在でも認められる台地上と谷底低地の差を、何種類かの地図や資料により明らかにした。

第三章「若葉町谷底低地の地域性格」では、第二章で明らかにされた若葉町谷底低地の地域性をさらに詳しく述べ、それに加えてこの地域性の形成にどのような要素が作用したかを考察した。

(3) 結果

四谷地区では都心業務機能の拡大に伴って本格的な事務所用ビルの建設もみられるが、主要道路の内側は依然として住宅地域であり、共同住宅が卓越する職住近接型の住宅機能が顕著にみられる。

この四谷地区の中で台地上と谷底低地では様々の点で差が認められるが、これは江戸時代にすでにみられ、台地上は武家地から旧山の手・高級住宅地域として、一方、若葉町谷底低地は裏長屋の集中する町屋から労働者の居住する下級住宅密集地域としてそれぞれ発展してきた。

このように若葉町谷底低地は過去から一貫して周囲の台地上とは対照を示す特有の地域性を持った零細住宅密集地域として発展してきたが、これは谷底低地という地形条件と東京の市街地の中での位置的条件、さらに交通との関係が加わり、これらが互いに結合しあって様々の条件を生み出し、この地域に作用を続けてきた結果であると考えられる。